

小学校家庭科における「家族・家庭生活」に関する題材の開発

担当者 伊藤雅子*・遠藤真央*, 石橋和子**

*岩手大学教育学部附属小学校, **岩手大学教育学部家政教育課

(令和2年3月4日受理)

1. はじめに

新指導要領では、家庭生活や社会環境の変化によって、家族の一員として協力することへの関心や家族や地域の人々との関わり、家庭での実践や社会への参画に対する意識が低いことが指摘されている。

しかし、小学校家庭科における「家族・家庭生活」に関する題材は、「衣食住の生活」や「消費生活・環境」と関連付けながら指導されることが多く、「家族・家庭生活」を軸とした実践例はあまり多くない。

そこで、「家族・家庭生活」を軸とした題材を開発することで、児童の家族や家庭生活・社会生活に対する興味や関心を高めさせ、家族や社会と積極的に関わろうとする児童の育成を図ることを目的とする。

2. 方法

(1) 研究計画

6月 学部との打ち合わせ

7月 岩手県小学校家庭科教育研究会
夏季研修会

10月 北海道・東北小学校家庭科教育研究大会
北海道大会

11月 Open Forum 授業研修会 (附属小)

(2) 研究方法

「家族・家庭生活」を軸とした題材を開発し、授業実践を行い、児童の変容を見取り、その効果等を検証していく。

3. 結果

(1) 題材の開発について

新指導要領において、「家族・家庭生活」の内容は以下の4項目で構成されている。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) 自分の成長と家族・家庭生活 (2) 家庭生活と仕事 (3) 家族や地域の人々との関わり (4) 家族・家庭生活についての課題と実践 |
|--|

その中でも(3)の指導事項「ア(ア)家族との触れ合いや団らんの大切さについて理解すること」、「イ家族や地域の人々とのよりよい関わりについて考え、工夫すること」に注目した。

まず、ア(ア)については、「家族の触れ合いや団らん」を題材のテーマにすることで、児童の家族や家庭生活に対する興味や関心を高めることができ、家庭科の学びが、自分だけでなく家族の幸せにもつながることを実感させられると考えた。

次に、イについては、「課題発見→解決方法の検討と計画→実践活動→振り返り・改善→実践」という学習過程を経ることで、家族と積極的に関わろうとする児童を育成できると考えた。

そこで、以下の2点を重点として題材の開発を行った。

- ・「家族の触れ合いや団らん」を題材のテーマにすること
- ・「課題発見→解決方法の検討と計画→実践活動→振り返り・改善→実践」という学習過程を経ること

(2) 題材1について

①題材名 「くらしを変える新たな一歩

～家族のためにできること～

②児童 6年いちよう組

③目標

家族との触れ合いや団らんの大切さについて理解し、よりよい生活のために、日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、計画を立てて実践することができる。

④題材の評価規準

○家族との触れ合いや団らんの大切さについて理解することができる。 (知識及び技能)

○家族との触れ合いや団らんの時間を増やしたり充実したりするため、自分の家庭に合わせて計画を立てることができる。

(思考力・判断力・表現力等)

○日常生活を見つめ直し、自分に出来ることは何かを考え課題を設定したり、実践したりしよとすることができる。

(学びに向かう力・人間性等)

⑤指導計画

時	学習活動・学習内容
1	・家族や家庭生活について見つめ直す。 ・家族との触れ合いや団らんの大切さについて知る。
課外	・家族がどのような生活をしているのかを調べる。
2	・調べたことをもとに、家族のために自分が出来ることは何かを考え、課題を設定する。
3	・家族との触れ合いや団らんの時間を増やすための計画を立てる。
課外	・計画をもとに家庭実践①を行う。
4	・実践の交流や振り返りを行う。 ・家族との触れ合いや団らんの時間を充実させるための計画を立てる。
課外	・計画をもとに家庭実践②を行う。
5	・実践の交流や振り返りを行う。 ・学習のまとめをし、これからの家庭生活について考える。

⑥授業の実際

○「課題発見」の場面 (1 / 5 時間)

児童は家族との触れ合いや団らんが大切なことは頭では理解しているものの、実際にその時間をとろうとすると、なかなか難しいのが現実である。例えば両親が共働きの場合、睡眠時間や勤務時間、通勤時間などを除くと、平日に親子が一緒に過ごせる時間は3時間程度である。そう考えていくと、家族との触れ合いや団らんの時間をとることが簡単なことではないことが分かる。その課題を児童に実感させるために、次のデータを提示した。

- ・親子が一生の中で一緒に過ごせる時間を合わせると9年間分しかないこと
- ・そのうち小学校卒業までに55%、高校卒業までに70%の時間を消費してしまうこと

これを知った児童からは驚きの声が上がるとともに「寂しい」といった呟きがあった。以下はその時間の振り返りである。

今までは、親に怒られると、家族じゃなくていいと思うことがありました。でも、今日の学習で「一生」で考えると9年しか過ごせないことを知って、これからは家族とのご飯など、日常生活を大切にしていきたいと感じました。

○考察

児童に、親子が一生の中で一緒に過ごせる時間を予想させると、10年間以下と答えた児童はいなかった。そのため、データを示した時に、児童の感覚と現実との間に大きなギャップが発生し、生活の課題をより自分ごととして捉えさせることができた。

その結果、児童が自分の家庭生活について見つめ直し、家族や家庭生活に対する関心が高まった。また、振り返りからも分かるように学習に対する意欲も高まった。

○「振り返り・改善」の場面（4／5時間）

1回目の家庭実践を受けて振り返りを行い、2回目の家庭実践に向けての計画を立てた。

1回目の家庭実践では、家族との「触れ合いや団らんの時間そのものを生み出す」ために自分ができることを実践した。

1回目の家庭実践で児童が行ったこと（一部）

- ・宿題を早く終わらせた
- ・ゲームを我慢した
- ・先にやることを終わらせた
- ・自分の時間を減らした
- ・お手伝いをした（食事の準備、風呂洗い等）
- ・お茶やお菓子を準備した
- ・一緒にいる時間を増やした
- ・できるだけ話を聞いたり話したりした
- ・昔のDVDを見た
- ・みんなを集めたり呼びかけたりした

上記の実践をお互いに振り返り・改善するために、以下の流れで授業を行った。

1. 児童が行った実践を全て紹介し、自分が気になった実践を選ぶ
2. 自分が気になった実践をを行った友達から話を聞いたり気になったことを質問したりする
3. グループごとに自分の実践を交流する
4. 2回目の実践に向けて計画を立てる

○考察

実践の振り返りを丁寧に行うことで、児童は自分の実践と友達の実践を比較し、そこから自然と2回目の家庭実践に向けて計画を考え始めていた。

2回目の実践計画を見てみると、よりよい団らんのために工夫しようとしている児童が多く、1回目の実践よりも質が高まっていた。また、振り返りからも家族のことを思う気持ちや、これからも実践を継続しようとする意欲が感じられた。

⑦児童の変容

「家族の触れ合いや団らん」をテーマに、「課題発見→解決方法の検討と計画→実践活動→振り返り・改善→実践」という学習過程を経たことで、児童に以下のような変容が見られた。

A児は1回目の家庭実践で、家族と外出に出かけた。しかし、友達が家で楽しそうに話しながら食卓を囲む様子を見て、次は自分の家で行ってみたいという思いをもつことができた。

B児は1回目の家庭実践で、みんなを団らんに誘うのは難しいと感じていたが、友達の「家族でトランプをした」という話を聞き、自分の家庭でも出来そうだと感じた。そして2回目の家庭実践で実際に行った。以下は児童の振り返りである。

- ・家族でトランプをしてみて、とても面白かったし、団らんする時間が増えてとても楽しかったので良かったです。これからも家族と過ごす時間を増やしていきたいと思いました。
- ・1回目よりも、もっと充実した家族との団らんを過ごすことができたので良かったです。これからも、みんなが笑顔で過ごせる団らんを、9年間よりももっと増やしたいです。

また、保護者からも実践に対するコメントをもらった。

- ・笑いが絶えず、楽しい時間を過ごせて良かったです。
- ・気持ちがゆったりして、優しさが伝わるような気がしました。
- ・私（母）と弟が好きなお茶とお菓子を選んだと聞き、とても嬉しかったです。
- ・「団らん」は私にとってとても「幸せ」な時間です。

保護者からのコメントを紹介すると、児童はとても嬉しそうな表情をしていた。

(3) 題材2について

①題材名 「家族へ感謝の気持ちを伝えよう

～心を込めたプレゼント作り～

②児童 6年いちょう組

③目標

小学校生活を支えてくれた家族の大切さについて理解し、家族へ感謝の気持ちを伝えるために自分にできることは何かを考え、心の触れ合いを大切にした家庭生活を送るためのプレゼント作りの計画を立てて実践することができる。

④題材の評価規準

○小学校生活を支えてくれた家族の大切さについて理解することができる。(知識及び技能)

○家族へ感謝の気持ちを伝えるためのプレゼント作りの計画を立てることができる。

(思考力・判断力・表現力等)

○日常生活を見つめ、心の触れ合いを大切にした家庭生活を送るために、自分ができるとすることは何か考えようとするすることができる。

(学びに向かう力・人間性等)

⑤指導計画

時	学習活動・学習内容
1	・2年間の家庭科の学習を振り返る。 ・小学校生活で家族にたくさん支えられていたことに気付く。
課外	・家族や家庭生活を観察し、プレゼントしたい物を考えたり、材料を集めたりする。
2	・プレゼント作りの計画を立てる。
3~7	・プレゼントを制作する。
課外	・プレゼントと手紙を家族に渡す。 ・家族からの感想を聞く。
8	・学習のまとめをし、これからの家庭生活について考える。

⑥授業の実際

○「課外」の調査活動について

家族と積極的に関わろうとする児童を育成するためには、学校での家庭科の授業の充実の他に、家庭での調査活動や実践活動を取り入れることが重要である。

そこで、今回の課外活動では、以下の3点をポイントに調査を行った。

1. 家族や家庭生活をよく観察すること
2. プレゼントの候補をいくつも探すこと
3. 作りたい物や相手に合わせた材料を選ぶこと

○調査結果

- ・チューリップの花束
(お母さんは花が好きだから)
- ・ハンコ入れ
(お父さんが持っているハンコがいっぱいケースに入りきっていないから)
- ・なべしき
(今使っている物が古くなってきたから)
- ・クッション
(自分が小さい時に来ていた思い出の服を使って作りたいから)

○考察

調査の際、3つのポイントをもとに調査を行ったことで、より家族や家庭生活に対して関心を高めることができた。特に効果的だったのは、プレゼントの候補をいくつも探させたことだと感じる。調査の段階でプレゼントを決定させると、考える物は1つでも良くなる。しかし、候補となると色々な可能性を探ろうとする。また、プレゼントの候補が多いほど、最終的な決定の際に「本当にこれでいいのかな」、「家族が1番喜んでくれるのは何かな」という思考が働く。その過程こそが、家族や家庭生活を見つめることや、心の触れ合いにつながると考える。

⑦児童の変容

「家族との心の触れ合い」をテーマに、学習過程の「課外」の調査活動を充実させたことで、児童に以下のような変容が見られた。

C児はクッションの真ん中に、家族の好きな馬の飾りを一生懸命縫いつけていた。

お母さんは馬が好きで、ホースセラピーという馬を救う仕事をしています。その仕事が成功するように、そしてお母さんの馬が長生きするようにと願いを込めてクッションの真ん中に縫い付けました。(※)

また、D児やE児は、プレゼントを制作している途中でも自分で課外の調査活動を続けていた。家族に喜んでもらえるよう、家族が好きな柄の布を探したり、家族が必要としている大きさの巾着にするためにサイズを測ってきたりしていた。

「課外」の調査活動によって、何度も家族や家庭生活を見つめさせたことで、「家族との心の触れ合い」や「課題発見→解決方法の検討と計画→実践活動→振り返り・改善→実践」という学習過程がより充実したものになった。その結果、児童の家族を大切にする心情や、家庭生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養うことができた。



※ C児の制作したクッション

4. 考察

小学校家庭科における「家族・家庭生活」を軸とした題材を開発において、「家族の触れ合いや団らん」を題材のテーマに、「課題発見→解決方法の検討と計画→実践活動→振り返り・改善→実践」という学習過程を経ることで、児童の家族や家庭生活に対する興味や関心を高めさせ、家族と積極的に関わろうとする児童の育成を図ることができた。もちろん、「衣食住の生活」や「消費生活・環境」と関連付けながら指導することも大切だが、「家族・家庭生活」を軸とした題材にすることによって、家庭科の目標にもある「家庭生活を大切にする心情」を豊かにしたり、「家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度」より育成することができると感じた。

5. まとめと今後の研究課題

今回は、家族・家庭生活に重点を置いて研究を進めた。家庭生活や社会環境の変化によって、家族の一員として協力することへの関心や家族との関わりが以前より低くなってきている今だからこそ、改めてその大切さを児童と共にこれからも考え続けていきたい。

今後は、家族から地域の人々との関わりや、幼児・高齢者の人との関わりに関する題材の開発を進め、地域の人々との関わりを大切にしながら、社会へ積極的に参画する児童の育成を図っていきたい。

参考文献

文部科学省小学校学習指導要領家庭科解説編